

香川さん一家は、なんと船戸旅館の隣に住んでおられたのです。引揚げのときは私たちよりも数倍の苦勞をしてこられ、引揚げ途中でご両親を亡くされ、弟さんと二人、孤児となつて散々な苦勞を経て、三十八度線を歩いて脱出されたそうです。

当時十九歳でしたが、途中同じように親を失った孤児たち十七人を連れて避難行をされ、引揚団の日本人たちにも見捨てられ、むしろ朝鮮の人たちの温情に随分助けられて、全員無事に日本の土を踏まれたのです。

六十年ぶりに再会した香川さんは大変に喜ばれ、是非、引揚げの苦勞記録を書くように勧められ、意を決して書くことになったのです。

北斗七星に祈る

三重県 児玉幸代

一 生い立ち

私は昭和五（一九三〇）年三月、朝鮮黄海道載寧郡新院鉄道社宅で、父母の三女として生まれました。

父は埼玉県出身で、東京の鉄道学校を出た後、朝鮮鉄道の技術屋として朝鮮に渡りました。母は小学校四年生のとき、一家で朝鮮全羅南道光州の近くの、松汀里に移り住んだそうです。というのは、母方の祖父が、若いころから広い土地で思い切り百姓がしたいという夢を持った人で、年金が下りるとすぐにそれまで勤めていた官職を辞して、妻子には年金を渡し、自分は退職金を手にして、一人で朝鮮に渡つたのだそうです。三年ぐらいは音信不通で、村では虎にでも食われたのだらうとうわさしていたそうですが、その後、「見通しがつ

いた」との知らせが入り、一家を呼び寄せたのだ
そうです。

祖父は研究心の強い人だったので、新しい野菜
や果樹の成育に挑戦し、地元の人たちと一緒に成
果を広げていったそうです。

タキキ種苗の木箱が、倉庫に山積みされてあつ
たのを覚えています。私は小学生時代、毎年夏休
みには祖父の家に行つて、温室で育てた「マスク
メロン」を、祖母の講釈を聞きながら食べた思い
出があります。

父は三年間くらいで転勤があつて、それにつれ
て家族も移つたので、各地にいろいろな思い出が
あります。

(一) 忠清南道清川（五歳始めまで）

女三人の後にできた弟が、この地で病死。毎日
仏壇の前で御詠歌をとなえていた母の姿は、当時
四歳だった私にも悲しみの姿として記憶に残つて
います。

この地では、お正月に獅子舞団が回つて来まし

た。「恐れけど来てほしい」と思いながら、大きな
鈴の音を待つていたことを思い出します。

(二) 忠清北道忠州（五歳～小学三年まで）

河と湖の街で、この地で小学校に入學しました。
学校帰りの川遊びが、何よりの楽しみでした。二
年生のとき支那事変が始まり、出征兵士を送りに
旗を持つて駅に行くことが多くなりました。昭和
十年五月に妹（四女）が誕生し、同じく十二年五
月には弟（次男）が誕生しました。弟の誕生は両
親を喜ばせました。

(三) 黄海道東海州（小学三年～六年）

東海州は鉄道の中核施設の地で、私は海州の小
学校に汽車通学をしていました。汽車を待つ間、
小石を集めてコンギという遊びを楽しみました。
これは朝鮮の子供の遊びだったと思いますが、日
本のおはじきに似ています。

紀元二千六百年の行事では、支那人の蛇踊りや
見上げるような竹馬の練り歩き、朝鮮人の民族衣
装での朝鮮舞踏、日本のおみこしや相撲などがあ

りました。特にお相撲さんを見たのは初めてで、横綱男女ノ川の見上げるように大きな体と長い顔、それに厚い唇にびっくりしたことが、楽しい思い出として残っています。内地の情報は、東京の学校に行っていた長姉が絵葉書で知らせてくれました。帰省時の姉の東京土産、中でも下関で買ってきてくれるバナナは大変楽しみでした。昭和十五年四月に弟（三男）が誕生しました。

（四） 黄海道おお津（六年生二学期の四カ月間）

父の管轄内で軍用列車の脱線事故があり、その責任をとり左遷されて移ったのが「おお津」でした。町中湯気の立ち上る小さな温泉町で、山には金の鉱山があり、海では牡蠣が名産で、夕食には必ず酢牡蠣や土手鍋として小粒の牡蠣が登場しました。学校は複式授業で町中顔見知りという感じで、学校帰りに温泉に入って帰ることもあるという穏やかな街でした。ここで昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃、太平洋戦争が始まりました。翌

十七年元旦の初詣には、父に連れられて雪の中で必勝祈願、武運長久を祈りました。

（五） 黄海道沙里院（六年生の三学期より）

昭和十七年一月、沙里院大和国民学校に転校、急遽沙里院公立高等学校女学校に入学願書を出しました。小学生時代は、昼は日本人学校へ通い、学校以外の時間は自宅の中で過ごしていて、朝鮮人と一緒に時を過ごすことはほとんどありませんでした。

二 内鮮共学の女学校に入学

昭和十七年四月、沙里院公立高等女学校に入学しました。沙里院高女は内鮮共学の女学校で、日本人五十人、朝鮮人五十人の混成で、一学年二クラスでした。大和国民学校に転校したばかりの私は、受験表が届くまでは内鮮共学であることを知りませんでした。朝鮮の人と一緒に勉強するということとは、日本人学校とは違った何かがあるのだろうか？ と思っていました。

制服にクロバーの校章を付け、胸をはずませ

て入学式に向かいました。学校側からは、内鮮共学ということについては特別なことは何も示されませんでした。が、「日本国民として」といった表現ですべてが進められていったように思いました。

友人からは学内では朝鮮語禁止、朝鮮人は級長になれないということ、当たり前のように聞かされました。配られた教科書は、海州の女学校（日本人学校）に通っている姉のものと大差ありませんでした。

朝鮮の人は年齢の高い人（小学校入学が遅れた人等）もいて、落ち着いた感じで大人に見えました。皆日本語が上手で、会話はもちろん何をすることも支障はありませんでした。朝鮮の人との付き合いは初めてで、何か違うところがあるのではと思っていた私には、別の意味で戸惑いもありましたが、抵抗なく新入生として共に学生生活になじんでいきました。

英語の教科書に、小さくハングル文字で振り仮名がふつてあるのを見つけました。平仮名では表

現できない発音も、ハングルでは表現できるということでした。朝鮮語や字を覚えるのもいいなあ、と思いました。

朝鮮の人は、作法の授業では長時間の正座が苦痛だったようです。裁縫は、浴衣から袴に入り羽織と進んでいきましたが、「着ることのない着物ばかりで、どんな気持ちで授業を受けているのかなあ」と思ったことがありました。

戦勝に沸き立つ中、学校でもテニスコートが唐胡麻ゴマの畑に変わり、防空壕が掘られ、朝礼では空襲に備え、B-29の爆音を聞き分ける訓練も始まりました。女学校にも配属将校が入り、軍事教練が加わりました。

そんなある日の授業中、窓の外にきちんとチマチョゴリを着た人が、うつろな目で教室に見入って静かに立っているのに気付き、「ギョ」としました。私の目は、先生を見詰めながら心は窓の外に釘付けになっていました。立ち去るように促す人もなく、先生も何もないかのように授業を続けて

いましたが、しばらくして家族の方らしい人が来て、二人で丁寧に頭を下げ、その場を立ち去りました。後でその人は頭の良かった先輩でしたが、抗日運動に走り、拷問を受けたためにあんなつたのだと聞かされました。自分の身近で抗日運動とか、拷問という言葉を聞き、私にはショッキングな出来事でした。

このことについては頭の中でいろいろな疑問や思いが膨れ上がりました。友と語ることもなく非国民なのだから、仕方のないことだったのだと自分を納得させていました。

この事件以来、朝鮮人は三人以上集まって話をすることは、暗黙のうちに禁じられている、ということも聞かされました。

学校では制服のスカートがもんぺに代わり、勤労動員に出ることが多くなってきました。

田植えの季節には、出征兵士の留守宅を一カ月くらいかけて回りました。動員先は郊外の紡績工場で、繭や羊毛で糸を繰るところから、反物にす

るまでの全行程を網羅した大きな工場でした。機械の錆落としてから始まり、織り機の作業まで女学生に任せられました。飛行機の燃料にと、松根掘りに斧を担いで山に通ったこともありましたが、今思い起こせば、本当に燃料になどなったのでしょうか。

教室では、古はがきを集めて飛行機の部品作りをしました。私共はお国のため、勝つため、銃後を守るためと、迷うことなく学業は次の次と思っていました。

昭和十九年二月に弟（四男）が誕生しました。

三 八月十五日を迎える

昭和二十年八月十五日は、朝から夏の太陽が照りつける暑い日でした。四年生は夏休み中、看護実習生として道立病院へ通っていました。

「今日は、正午に重大放送があるから必ず聞くように」と父に言われていました。病院では午前「診療を早めに終わらせ、重大放送を気にしながら、午後の時間を待っていました。午後外来が

ないので、人の出入りも平常でも少ないのですが、その日は何かいつもと違うことに気付き、散歩の途中急いで控室に戻りました。緊張感が漂う中の雰囲気に、戸惑いました。

「戦争に負けたらしい」という情報が伝わってきて、一瞬間の回転が凍りつきました。振り向くと、朝鮮の友人グループが目に映りました。未だかつて無かったことではありますが、戦争に負けたということを、一体どう受け止めたら良いのか悩みました。

級長の鈴木さんから、「先生がお見えになるから、荷物を持って玄関前の広場に集まるように」との伝言が伝えられました、そのとき初めて、戦争に負けたのは本当かもしれないと思いました。間もなく福島先生がいらっしやって、「元気でやっとなるか!」と、いつもと変わらぬ声掛けに、「ホッ!」と緊張が解けました。医務局から戻った先生は、しばらく皆の顔を見回し、「戦争は終わりました……。今日の実習はこれで終わりにします。

明日からは、学校からの指示があるまで自宅で待機しているように」との訓示をされ、さらに「帰りは本通りを通り、まとまって帰るように」との注意をされて自転車で先に帰られました。街の本通りを「戦争に負けた!」「戦争に負けた!」と心の中で呪文のように唱えながら、急ぎ足で黙々と歩いていました。三叉路で霊泉面に帰る友人と「また明日ね!」と別れましたが、もう明日はありませんでした。

いつもと変わらぬ町並みを急ぎました。ホームドクターの斉藤医院の待合室には人影がなく、床屋さん、お菓子屋さん、洋品店はいずれも開いてはいませんが、お客さんはいませんでした。

大和国民学校では、駐屯している兵隊さんが忙しげに動いていました。「この兵隊さんたちはどうなるのでしょうか?」「内地に帰るのでしょうか?」と考えてしまいました。学校の裏門近くの社宅に住む私は、同じ井戸を使っている顔見知りの兵隊さんのことが気になりました。

夜半、東の空に火の手が上がりました。庭に出てみた私は、一瞬息を吞みました。火の粉が高く舞い上がり、山が燃えているのです。その火勢に呼応するように、群衆の雄叫びが唸るように夜の闇を駆け回り、言いようのない恐怖感が襲ってきました。これから大変なことが起きるような予感・不安・恐怖。朝鮮で生まれ育って十五年、真実植民地に住んでいたのだということを実感し、思い知らされた日でした。燃え上がる火の粉と興奮の渦の中にいるであろう、昼間別れたばかりの朝鮮人の友の顔は思い浮かびませんでした。

翌朝、沙里院神社が焼かれ、小さな暴動があちこちで起き、警察、軍関係の幹部がトラックで逃走したらしい、という情報も入ってきました。「鉄道員は一世帯七個の荷物を送ることができるので、至急届けるように」という知らせが入りました。社宅の人は、大急ぎで荷造りして運び出しました。それが、自分たちは手を掛けずに略奪する手段だったと知るのに、時間は掛かりませんでした。

四 終戦から脱出まで

ソ連兵が進駐して来たのは八月二十九日だったと思いますが、その日から私たちの生活は一変しました。夜は早くから電気を消し、布団を敷かず寝ました。夜の来訪者を、ロスケと間違えて下水道に逃げ込んだことがあります。学校にいた兵隊さんが逃げ出してきて、民家で私服に着替え、夜の闇に消えていきました。ほどなく多くの兵隊さんたちが、トラックでどこかに連れて行かれたらしいという話が伝わってきました。

九月一日、学校から招集が掛かりました。町内に住む先生と日本人の生徒だけでしたが、半月ぶりの再会に喜び合いました。在学証明書を発行してもらった後、朝鮮独立の旗行列に使う旗作りをしました。日の丸の旗の四隅に朝鮮国旗の印を付ける作業でした。悔しさが込み上げてきましたが、皆黙々と作業を続けてお別れしました。この日が、先生や友人と顔を合わせた最後の日となりました。九月に入つてすぐ、日本人は社宅を出され、数

カ所に集結させられました。荷物を出す間もなく、朝鮮人が入って来ました。そのときの我が家は、銀行員の長姉二十歳、会社員の次姉十八歳と私十五歳、妹十歳、弟八歳と五歳と一歳の九人家族に、夫を兵隊に送り出していた、従姉が終戦後逃げて来て十人の大所帯となり、西さんのお宅に移りました。西さんは元本屋さんで、家族三人でした。ここは双葉山ゆかりの双葉旅館の裏手でしたが、日本人は双葉旅館を始め、この界限に集結していました。

ロスケは腕時計や貴金属などの強奪に加え、婦女暴行も始まり、それがだんだんとエスカレートしてきて、夜はいつでも逃げられる態勢で過ごすことが、普通になりました。

十月に入ったある夜、まだそんなに遅い時間ではなかったと思いましたが、隣との境の板塀を「ヤポンスキー、マダム！」と大声をあげてたたく音に、女六人（我が家五人と西さんの小母さん）が店の裏の小さな木戸口に急いで集まりました。ひ

と塊になった中で、次姉の歯の根がカクカクと鳴る怯えの音が、今も耳の底に残っています。

一人一人、時を見計らっては裏に飛び出しました。小母さんが、「幸ちゃん、落ち着いてよく見計らって出るのよ」と言い残して飛び出しました。

最後になった私は、「落ち着いて！ 落ち着いて！」と自分に何度も言い聞かせながら、小母さんの気配が無くなったのを見計らって飛び出した途端、路地を隔てた隣の家の庭から、バケツの転がるような大きな音と女の人の悲鳴を聞いて、私はその場に座り込んでしまいました。下半身に力が入らず、立ち上がれません。肩と腕を使って這いずりながら、やっとたどり着いたのが、庭の隅にあったコンクリートのゴミ箱でした。私は、すぐゴミ箱の裏に滑り込みました。近くに鶏小屋がありました。「鶏さん鳴かないで！」と祈りながら、両膝を抱えて丸くなって、ときの経つのを待ちました。十月ともなれば北朝鮮の明け方は寒く、たくさん着込んでいても足のほうから冷えてきます。

一番鶏が鳴き、周囲の景色が姿を見せ始めたころ、あちこちに隠れていた姉たちが、様子を伺いながらワラくずやゴミまみれになって現れ、お互い顔を見合わせて泣き笑いでした。

いつになったら引揚げができるようになるか分からない状況の中で、コックリさんが流行し、一喜一憂したりしていましたが、お金をどうして持つて行くか、食糧はどんなものを用意するかなど、いろいろと考えていました。

そんなときの夕方は、三々五々縁台に集まって一日の出来事を話し合ったり、使役に出ていた人から外の情報を聞いたりする、楽しみの時間でした。

ある日のこと、十九歳になる青年が初めて顔を見せたので、座も弾み楽しんでいたとき、どこから入ってきたのか朝鮮人の男が三人連れ立って来ました。そして、その青年に向かって「お前は沙里院の駅で切符売りをしていただろう！」と詰め寄りました。「切符を売ってくれなかったな！

覚えているだろう」と言ったときには、もう太い革ベルトの口金が宙を飛んでいました。「あつ」という間の出来事でした。朝鮮人が帰った後、形相の変わった顔、血の吹き出した体や手足を氷や水で冷やし、傷の手当てをしました。

それから二日後、腫れの引かない顔や手足で、今夜脱走すると告げに来ました。もう少し腫れが引いてからと勧めましたが、「切符制限にかかった人はまだいます、また来るかもしれませんから」と、その夜脱走しました。その青年は群馬県の人だと言っていました。

私共は、西さんの所から少し奥の家に移り、家族だけの生活が始まりましたが、一週間ほどして朝鮮人の一家が引越してきました。学校の先生で親子三人の家族でした。母が「仲良くするのよ」と言ったので、一緒に暮らすのだなあと思えました。

年が明けても、まだ正式な引揚げの話はありませんでした。敗戦後すぐに金融関係は封鎖され、

外出もできず働く場所もなく、商売もできない状態が続きましてので、手持ちの現金も乏しくなり、冬物衣類の不足や大所帯の食糧の調達に苦勞しました。

ソ連軍の憲兵が進駐して来て、サイレンの合図で午後十時から午前四時までには外出禁止となりました。街中の治安は少しづつ落ち着いてきました。そんなとき、私は朝鮮人の家のお手伝いさんに、次姉はロシア軍将校の家のメイドに行くことになりました。

外に出ることのなかった私は、半年ぶりに本通りに出ました。『偉大なる指導者金日成』の看板が至る所に掲げられていたり、ハングル文字で書かれた標識等で、違う街に迷い込んだようでした。姉と私はとても良いマダムとオモニに使われ、少しの間でしたが新しく落ち着いた体験をしました。沙里院は、平壤（ピョンヤン）と京城（ソウル）を結ぶ鉄道の沿線にありましたので、北からの引揚避難民が貨車で運ばれて来ました。うわさとし

て流れてくるのは悲惨な話ばかりで、水一杯、おにぎり一つを持つていくことができなののが悲しく、貨車が動き出すことを祈るばかりで、いつ我が身かと恐ろしい思いでした。

五 いよいよ脱出！

足手まといになる女、子供、老人を抱える家族が集まって、脱出の計画を立てました。四月二日脱出の決行が決まり、その前夜同居している朝鮮人の先生一家がお別れの夕食会をして下さいました。先生は、「皆さんが無事に三十八度線を脱出できると祈っています」と言ってお下さり、オモニは泣きながら母の手を握ってくれていました。

四月二日、夜間外出禁止解除のサイレンと同時に、裏木戸から通りに出ました。四月の明け方はまだ冷え込んでいて、暗闇の中で吐く息が白く見えました。所定の待ち合わせ場所に、六世帯三十八人が時間どおりに集まりました。三十八度線まで直線距離にして約二十里、人の通らない山を迂回しながら進まなければなりません。何かあった

ときは、家族がまとまって行動するように注意され、大通りを横切り、裏の路地を急ぎました。寝静まっている家の間を、犬の鳴き声に「ヒャー」とさせられながら通り抜け、暗いうちに危険地帯を抜けるようにと急ぎました。人が動き出す前に山の裏手に回ろうと、畑の中を走りました。

三十分も走ったでしょうか。リュックサックは重たく肩に食い込み、疲れ始めた子供はぐずり出したり、兄弟喧嘩を始めたりと落ち着かなくなつたので、山かげに入った所で休憩しました。太陽が昇り始めましたので、もつと安全な場所に向かつて移動し、早めの昼食のお握りを食べました。

夕方になると、朝鮮人二人が棒で草を分けながらやって来ました。「今から歩き始めても山ばかりだから、今日はこの部落に泊まって行くがいい」と声を掛けられました。言われるままに泊まるしかありませんでした。柱に屋根があるだけの、作業場のような小屋でした。脱出行初めての夜、何が起きるか分からず恐ろしい思いでした。脱出前

に聞かされていたのは、「朝鮮人は、金と物を盗るだけだが、ロスケは恐ろしい。ロスケには知られないように気を付けることだ」と聞かされていた。

小屋に入ると身体検査がありました。身体検査は初めてのことで、子供たちは恐怖に脅えて泣き出しました。大人の男女は別にされました。吹きさらしの小屋の壁に寄り掛かって夜明けを待ちました。夜更けに朝鮮人の怒鳴り合う声を聞いて、恐ろしくなりました。略奪品の分配のことで争っているようでした。貴金属はもちろんのこと、金目のものはリュックサックの中から無くなっていました。

一睡もできないままに朝、解放されて南に向かいました。昼は山の中に潜み、暗くなつてから歩き出すという生活が続きました。朝鮮は一山越すと山間に小さな集落があります。それを避けながら、南に向かいました。子供たちも、ぐずることなく大人に寄り添って歩きました。五歳の弟も、

お米の入った靴下を鍋ぶたにぶら下げ、それを背負って歩き続けました。

沙里院を出て五日目の朝だったと思いますが、部落民に見つかり身体検査、荷物検査を受けた後連れて行かれたのが、私共より二日前に沙里院を出たという百人ほどの団体が、止められていた部落でした。皆相当に疲れている様子でした。男の人は全員どこかへ連れて行かれたとのことで、ロスケに引き渡されるのではないかと緊張が走りました。

この部落は、今までの集落とは違い大きな部落のように思われました。大きな建物もいくつもあり、人々がそれぞれの役割で働いているようでした。女の人は、二、三人ずつまとめて部屋の一室で身体検査が始まりました。今まで三回も大人は上半身を裸にして調べられ、ねんねこの綿まで引きちぎられての検査でしたので、私たちは少し反抗的な気持ちを起こしていました。隣で検査を受けていた小母さんが、その様子に気が付いたので

しよう。よろけた振りをして私の耳元で「貴女一人じゃないんですよ」と囁きました。私は、はつとしました。みんなで逃げて来た五日間がよみがえってきました。私の顔をじーっと見ていた朝鮮人に、私は洋服のぼたんをちぎって黙って渡しました。その朝鮮人は、私の顔をじつと見ながらボタンを手の上で二、三回転させて、何も言わずに私を解放してくれました。ボタンは、姉が紙幣をこよりにして丸めたものでした。

外に出たら、男の人が私の手を引いて別の方向へ連れ出しました。「幸ちゃん！ 幸ちゃん！」という悲鳴のような母の叫びが聞こえましたが、振り向くこともできずに連れて行かれました。着いた所は、東雲保安所と看板の掛かった事務所でした。

だっ広い部屋に大きなテーブルが置かれていて、男の人が四人ぐらい座っていました。なぜここに連れて来られたのか？ ここの小使いとして残されるのではないかととつさに思いました。

髪を短くオカッパにしていた小柄な私は、十二、三歳くらいにしか見えないはずでした。「年はいくつ」「はい……」一瞬の間に何歳と答えたら良いか、頭の中は猛スピードで回転しました。「十七歳です」えーというように、全員が一斉に私の顔を見ました。私の気持ちは、潮が引くように落ち着きました。「何年生まれの何どしだ」「四年の巳です」私は、一つ年上の同級生のことを思つて答えました。「学校は?」「沙里院高女四年生です」。皆が顔を見合せていましたが、何やら朝鮮語で話し合つてから、私を連れて来た人に目配せして、私は外に出され解放されました。父とも合流し、部落を離れて山かげで暗くなるのを待ちました。

二つの団体が合流して総勢百三十人くらいだったと思いますが、それを三班に分けて時間差を設けて班ごとに出発することに決まりました。私たちは最初の班で、八時ころ出発しました。三十分ぐらい歩いたとき、遠くの方で「イリボンサラミ（日本人）」という声がありましたので、みんなは急

いで逃げました。弟の手を引き、小株につまづいたり、やぶ草や小枝で顔を切ったりしましたが、夢中で走りました。迫つて来る様子がないので、小声で声を掛け合い一所に集まり、家族ごとになん事を確認しました。「おじいちゃんがない」という娘さんは、「このまま進んで下さい」と言いました。「探してみましよう、駄目なときは諦めて下さい」と言つて、中年の男性と青年の二人が今逃げて来た道を行きました。しばらくして、青年がおじいさんを背負つて帰つて来て、娘さんに言いました。「木の下にうずくまっていますよ」娘さんは涙を流して喜び、皆もほつとしました。足を止めると寝てしまいますので、家族を確認しながら進みました。山の斜面の道に出て歩きやすくなり、黙々と急ぎました。そのうちに、先頭が止まりました。皆、山の斜面にうつ伏せになり、赤ん坊を背負つた母親は乳児に乳を含ませました。

地面に耳を押しつけていますと、かすかに軍靴

らしい足音が聞こえてきました。ロスケでは、と胸の鼓動が早鐘のように打ちましたが、軍靴の音はだんだん近くなり、ついに暗闇の中でキラリと光るものが見えました。ロスケの銃剣だと思い、目をつむって草むらに伏せました。すると、「日本人ですか？」というきれいな日本語が聞こえました。朝鮮の警備隊の人でした。再び「日本人ですね？」と問われ、だれかが「はい、日本人です！」と答えると、しばらく間をおいて、「後二十分で交代の者が来ます。それまでに、私の目の届かない所まで逃げて下さい！」と言われました。思いがけない言葉に深く頭を下げ、みんなは感謝の気持ちを伝えて、寝ている子供を起こして歩き始めました。その背中から「順調に行けば、明け方には三十八度線に着くでしょう。気をつけておいでなさい」と声を掛けてくれました。地獄に仏とは、このことだろうと思いました。この人のことは、その後の私の人生の中で、時々浮上してくる人になりました。

なるべく早くここを離れ、少しでも遠くに行こうと急ぎました。一時間も歩いたころ橋にさし掛かり、渡りきつたと思ったとき、突然に「待て！」という声が聞こえました。みんなは夢中で逃げましたが、最後尾の人が捕まり、結局私たちは周囲に何も無い、電気も付かない小屋に連れて行かれ、そこで明るくなるのを待ちました。小屋の裏は山で、前は大きな川でした。三十八度線は川越えか山越えと聞かされていきましたので、ここではないかと思いました。

次姉が今まで隠してきた大切な数枚の写真も、ここで取り上げられました。「我々は共産党員だから」と言つて、取り上げたお金から一人二十円ずつを渡されました。初めてのことで少々驚いていました。帰り際には「皆さんはとても良い日に来た。今日は近くの村のお祭りで賑わい、ソ連兵も招待されているはずだから、警備も手薄になると思う。昼間はソ連兵に気付かれないようにして、暗くなってから行動して下さい」と言い残して帰

って行きました。夜になると、頼みもしない案内人がやって来て、お金を要求されました。

一家族または二家族がまとまって、時間差を設け山越えを決行することになりました。我が家は最後になりました。六日間ずっと歩き続けた五歳の弟を父が、その下の弟は長姉が負ぶい、足の弱い母には次姉が付き添い、妹と上の弟と私は従姉と離れずに走るといふことで、決行のときを待ちました。待つ間、それぞれの家族が無事南朝鮮の地に渡れるように、北斗七星に祈りました。

私共の前の家族が山を降り始めました。父はその様子を見守っていました。今か今かと待つ間の長かったことを時々思い出します。

父の手招きの合図で山の上に登りました。「怪我などしたらお終いだから、慌てずに行動するんだよ」と父に言われていたことを思い出し、気持ちだけは慎重に思っているのですが、足が言うことを利きません。するつと滑って尻餅をついたり、妹や弟の手を引きながら一緒に転んだりして、

夢中で山を降りました。山の向こうから笛や太鼓の音が聞こえてきました。左手に、ぼつんとポリスポックスのような粗末な小屋が建っていました。ソ連兵の警備の場所かな、と思いました。

四、五十分も走ったでしょうか、鉄条網かと思われる鉄線が張ってありましたが、簡単に通り抜けられました。その先に、「青円」と書かれた標識がありました。南朝鮮に入ったのではと思いましたが、仲間の姿を探して走りました。道路に出たと思ったら、その先の草むらに皆が座って待つていてくれました。足首を捻挫した小母さんも、笑って迎えてくれました。姉が、「途中の山かげに、ソ連兵が銃を持って立っているのが月の光で影のように見えた」と言いますと、何人かが「私も見た」と言い、「やはりそうだったのか」と頷きました。私には何も見えませんでした。ソ連兵は分かっているながら逃げる私たちを見逃してくれたのではないか、と思えました。夜が明け始めた空の輝く澄んだ星空は、すばらしく綺麗でした。三十

八度線を思うとき、いつもあの星空を思い出し
ます。

村の明かりが見えました。「もう逃げなくても
よい！」と思うと、その明かりが気持ちを和ませ
てくれました。捻挫した小母さん家族を避難所に
残して、私共は駅に向かいました。

六 京城へ、そして日本へ

貨車には、溢れるほどの人が乗っていました。
私共が乗ったのは、動物（牛、馬）を乗せる大き
な貨車でした。「開城まではずいぶん、我慢し
て下さい」と言われて、貨車の中に立ったままの
姿勢で詰め込まれました。汽車が動き出したとき
は、夢のような気持ちでした。密封された貨車の
中はすぐに暑くなり、上着を脱ぎましたが、それ
でも息苦しくなってきた、少しでも楽に息ができ
るようにと子供は裸になって肩車をして上にあげ
ました。酸欠のため胸が痛くなりましたが、走っ
ている貨車の扉を開けることはできません。貨車
がガタンと止まった瞬間、「俺たちを殺す気か！」

と怒鳴りながらホームに転がり落ちる人もいまし
た。

息ができない！……。そのとき、「ヤンバン」と
言つて父のそばに駆け寄つて来た朝鮮人の鉄道員
が、私を見てすぐ飯盒の蓋に水をなみなみと入れ
て飲ませてくれました。一気に飲み干した途端、
深呼吸ができました。「死ぬかと思つた！」と言つ
たら、その人は涙を浮かべながら頭を撫でてくれ
ました。

今度は人数を減らし、貨車の戸を半開きにして
出発しました。出発のとき、鉄道員の人が父に水
筒を渡し、何度も握手していました。水筒の中身
はお酒でした。

やつと京城に着きました。京城の駅では、アメ
リカ兵によつてDDTの洗礼を受け全身真っ白に
なりましたが、お互い真っ白な顔を見合せて笑
いました。明るく笑つたのは、何カ月ぶりのこと
だったでしょう。検疫を受けてから、本願寺の避
難所に行きました。何百畳もあるかと思われる大

広間は、家族ごとにまとまった人々で埋め尽くされていきました。久しぶりの畳の感触に癒されました。疲れと安堵感で亡くなる人が増えましたが、特に男の人に多かったようです。京城まで来たのに、と悲しい思いでした。

二、三日滞在してから、釜山行きの列車に乗ることができました。釜山でも、多くの避難民が乗船の順番を待っていました。私たちは運良くその日の夜の舞鶴行きの貨物船に乗船することができました。広い船底で、もらった毛布を広げ、横になって出航を待ちました。私のすぐ近くに私と同じぐらいの年の女の子が、何やら意味のないことをブツブツとつぶやきながら横になっていました。そばにいた小父さんが、「この子は一人朝鮮に残されていて、精神が壊されてしまったらしい。日本まで連れて帰ってほしいと頼まれてね」と言っていました。私は東雲保安所のことを思い出しました。私も残されていたら、こんなになっていたかもしれないと思いました。船では、蚤と食事

に閉口しました。麦ばかりのお握りは、胃が受け付けませんでした。脱出行でお腹がすいて歩けなくなっただけのことを思い出して、少しでもお腹におさめなければと、お茶や水と一緒に飲み込んでも戻してしまう有様でした。

出航して四日目の朝、「日本だぞー」という声を聞いて、甲板に飛び出しました。美しい山々の緑が目に入ってきました。私にとっては初めての日本です。小さいときの思い出の中には、この緑はありませんでした。舞鶴港に着いて、停泊三日で下船することができました。桟橋には「お帰りなさい」と書いた垂れ幕が下げられ、「お疲れ様でした」「お帰りなさい」と涙を流して声を掛けて下さる人でいっぱいでした。ここが私の国日本なのだと思うと、涙が止まりませんでした。ここでも、またDDTに全身まみれました。また、発疹チフスをはじめとする四本の予防接種も受けました。その夜、妹が高熱を出しましたので、熱の落ち着くのを待つため、舞鶴港で二泊しました。ここで、

水兵さんの半袖シャツや毛布を頂きました。

七 いよいよ故郷へ

四月二十一日、埼玉で農業をしている父の姉の家族に迎えられました。びっくりしている伯母に、一人も欠けることなく帰って来られたことを喜んでもらいました。従姉は、ここから両親の許に帰りました。私たちは二十日ぶりのお風呂、湯気の立つ白いご飯、そして温かいみそ汁を頂き、伯母さんの孫とふざけ合っている弟の姿を見て、本当に日本に帰って来たのだと実感しました。私たちは、その日から納屋の二階に住まわせてもらうことになりました。

父の友人の奔走で、父は役場の臨時職員として耕地整理の測量の仕事に就き、私たち三人姉妹は、東京から疎開していた全国農業会の調査部に入ることになりました。このとき、私の頭には復学するということ、全く考える余裕がありませんでした。調査部では調査統計の集計が仕事でした。算盤を手にした事もない私を雇って頂いたのだか

らと、その日から毎晩姉の算盤特訓を受けました。二カ月ぐらいで、何とか人並みにはじけるようになったときは、嬉しいことでした。母も、お茶の行商で近隣の農家を回って歩きました。

一年ほど経つと、旧軍の兵舎が引揚寮に改造され、物心両面でお世話になった伯母さんの家から、寮に引越しました。引越してから間もなく、父が脑梗塞で左半身麻痺となりました。全農が東京に戻ることになりましたので、私たち三人姉妹は全農の計らいで農業試験場に就職しました。

引揚寮に四年ぐらい住んだ後、市営住宅に移りました。二軒長屋でしたが庭付きの家で、弟たちは喜びました。

昭和二十七年には長姉が結婚し、相次いで次姉も嫁ぎ、貧しいながらも多くの人に助けられ、平穏な日々を送ることができました。家族全員欠けることなく帰って来られたのが、何よりの幸いでした。自分が家庭を持ち、子供を育てるようになると、当時大家族を抱えての両親の苦勞はいかば

かりだったろうと、今更ながら思いを馳せるとき、今は亡き両親に感謝の気持ちでいっぱいです。

八 おわりに

戦争は人間だけがする行為です。その戦争に巻き込まれた者として、今生きている事の喜びと、誰の心の中にもある愛の光、愛の灯びをいかなる時にも消さないで灯し続けて行こうと伝え続けていきたい。

釜山からの引揚げ

大阪府 中林 正人

一 終戦の日

その日も、朝からよく晴れて暑い日だった。朝鮮慶尚南道金海国民学校六年生の夏休みも、半ばを過ぎて後半に入っていたが、町外れの山で松根油採取の勤労働員は連日続けられ、この日も朝から汗だくになった末、引率の先生から「南洋はもつと暑いぞ。そんなことでは前線の兵隊さんに顔向けできるか」と、いつものお決まりを長々と聞かされていた。その日、正午にラジオで重大放送があることは、前日に知らされていたが「一億玉砕、一層奮励努力せよ、ということだろう」と、午前の作業終了時にも先生からそれ以上の話はなかった。その日の昼食はどうしたのか、ただ静かな午後だったという思いだけが残っている。

異様なざわめきが広がり始めたのは、夕方近く